

# 論文の引用・解釈構造

## ——人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究——

山本富美子・二通信子

### 要 旨

人文・社会科学系に多い「資料分析型」論文で、論文筆者が資料をどのように引用・解釈して結論へと導いているのか、論理展開のための解釈構造を分析した。その結果、引用・解釈に関わる文には「A 中立的引用文」、「B 解釈的引用文」、「C 引用解釈的叙述文」、「D 解釈文」の4種があり、それぞれ独自の機能を果たしていることが判明した。A は資料の着目点を中立的立場から引用・提示し、B は資料を論文筆者の立場から引用して解釈構造の軌道に乗せる。C は資料との内容的関連性を持たせつつ論文の解釈構造の中で引用叙述し、D は資料には一定の距離を置いて読み手を論文の解釈構造の中に巻き込み、主張・結論へと導く。論理展開パターンにはDの論点提示からA、B、Cの引用・解釈、Dの論文筆者独自の議論を経て、重要な論理展開要素の認定または内容の小括で締めくくられる。量的特徴からもB、C、Dの効果的指導が求められる。

【キーワード】 アカデミック・ライティング、資料分析型論文、テキスト分析、論理展開

### 1. はじめに

人文・社会科学系分野を専攻する留学生の比率は、社会科学 38.6%、人文科学 21.1 % と高く、全体の約6割を占めている<sup>(1)</sup>。これらの分野では、日本語の論文を理解し、さらには日本語で論文を執筆することへの要請も他分野に比較して高い。一方、人文・社会科学系論文には、資料の引用・解釈によって論述を展開する「資料分析型」論文が非常に多いことが報告されている（佐藤他 2013）。このことから、人文社会科学系論文指導には、その引用・解釈構造の究明が喫緊の課題であると言える。

引用・解釈に関する研究には、発話資料を中心とした砂川（1988, 1989）、藤田（1986, 1988）、中園（2006）など、引用を伴う解釈研究がある。しかし、論文についてはこれまで引用の形式・方法などを中心とした研究が主で、引用・解釈による論理展開構造に着目した研究は管見の限り見当たらない。そこで本研究では、論文筆者が資料をどのように引用・解釈して論理展開しているのか、また引用・解釈に関わる文が他の論文構成要素とどのように関連して結論に導かれているのかに着目し、引用・解釈文の特徴および機能の分析を通して引用・解釈構造を明らかにする。論文の引用・解釈構造の解明は、人文・社会科学系の論文だけではなく、実験・調査型、理論型などの構造型（佐藤他 2003）を持つ他の論文においても、その前提条件となる先行研究の引用・解釈指導の指針になるものと思われる。

## 2. 先行研究と本研究の目的

### 2-1 人文・社会科学系に多い「資料分析型」論文の引用・解釈

佐藤他（2013）では人文・社会・工学系論文 270 本<sup>(2)</sup>の構造型を調べた結果、①実験 / 調査型、②資料分析型、③理論型、④複合型の 4 つのタイプが見られ、このうち人文・社会科学系には「資料の引用・解釈によって論述を展開する」②資料分析型論文が多いことを報告している。特に文学は 90.0%，社会学は 53.3%，政治 / 経済学は 66.7% と、極めて多い。日本語学、日本語教育学では②資料分析型と①実験 / 調査型の両構造型を併せ持つ④複合型が多い。日本語教育学では①実験 / 調査型も多い。しかし、人文・社会学系では①～④のいずれの構造型であっても、その 9 割が論文の構成要素として資料の引用・解釈を必要とする「先行研究の検討」を行っている。また、①実験 / 調査型が大半を占める工学系論文においても 3 割が「先行研究の検討」を行っていることから、論文執筆における資料の引用・解釈は、人文・社会科学系はもちろん工学系でも重要な位置を占めるのではないと思われる。

### 2-2 引用・解釈に関する先行研究

引用・解釈に関する先行研究には、これまで発話における引用を主にした藤田（1986, 1988）、砂川（1988, 1989）、中園（2006）などがある。砂川（1989：363）は、引用文は「発言の場にそれとは別の場における発言や思考が再現されており、文が二重の場によって構成されている」とし、大きく二つに分類している。

例 1) 社長は「早く帰れ」と a. 言った b. 気遣った c. せかした d. 命令した。< 作例 >

例 2) 社長は「早く帰れ」と ドアを開けた。< 作例 >

一つは、例 1) のような「発言や思考という一つの事態」を再現した引用句と「それに注釈を加えた」動詞とに分節化した「単一事態型の引用文」である。もう一つは、例 2) のような「引用句に示される発言や思考という事態と、述部動詞によって示されるそれとは別の事態という異なった二つの事態が、単なる偶然の共存にとどまらず、それを越えた何らかの根拠のある結びつきによって同一場面的に共存するという関係を成り立たせている」「事態共存型の引用文」である（砂川 1989:363-364, 藤田 1986）。砂川（1989）は「単一事態型の引用文」について、引用句との共起が必須の引用動詞が用いられている例 1) a のような文を基本型として位置付けている。しかしその一方で、引用動詞以外の述部動詞を用いている b, c, d の引用文も「一つの事態」を言い表しているとして「単一事態型」に含め、発話行為論の視点から分析している。そのため、「言う / 叫ぶ / 怒鳴る」などの発語行為、「述べる / 命令する」のような述べ立てや命令の発語内行為、また「気遣う / せかす」のような発語媒介行為を特定する動詞の引用文も、二つの場で同一の事態が扱われている限り「単一事態型」となる。しかし、引用者の解釈という視点から考える時、引用動詞か引用動詞以外の述部動詞かの違いは、引用者の解釈程度にかなりの違いがあると感じられる。特に論文では、書き手には未体験の事態が描写されている資料をまず解釈して論文に取り込むことから、例 1) の a-d の引用文がすべて「単一事態」になるのか疑問に思われる。

一方、中園（2006）は場の二重性を前提としながらも、元発話の力が伝達部の引用動

詞にどのように関わっているかに着目して大きく2分類している。一つは「感嘆、挨拶、質問、祝福、罵詈」など、元の発話の効果が引用場面では消失する発話行為である。これらは「言う」では間接引用が成立せず、その発話の力を「感嘆した」などの述部動詞で補う必要がある。

元の発話：太郎「君はなんて強いんだ」

間接引用：○太郎は私はなんて強いんだと感嘆した。

×太郎は私(=太郎)はなんて強いんだと言った。

もう一つは「約束、依頼、主張、命令、報告」など、元発話の効果が引用場面でも持続する発話行為である。これらは発話の力を補う必要がなく、「言う」だけで間接引用が成立する。

元の発話：太郎「君と結婚する」

間接引用：○太郎は私と結婚すると約束した。

○太郎は私と結婚すると言った。

この分類は、発話行為のみを特定する中立的引用動詞「言う」の特異性と、それ以外の述部動詞の意味的異なりの存在を示唆している。

以上、発話を主とした引用研究では多くの興味深い知見が示されている。しかし、発話行為は「聞き手によって発話内の受け止め方も変わるので均質ではない」(加藤 2004: 215) ことを考えると、引用者の解釈を伴う引用研究では「聞き手または読み手側の解釈」をより重視して考える必要があると思われる。特に論文では、資料の「読み手としての論文筆者の解釈」が論理展開の方向性に大きく影響すると思われ、解釈の重要性は会話以上ではないかと推測される。しかし、これまでこうした論文の引用・解釈構造に着目した研究は皆無に等しい。そのため、他の資料の引用を単に羅列しているだけの日本語学習者の論文を前にして為す術がなく、引用内容をどのように解釈し自身の研究テーマに結びつけて論理展開すればよいのか、指導上大きな困難を抱えてきた。そこで、本研究では発話の引用研究の成果を踏まえて、論文中の資料の引用・解釈に関わる文に着目し、それらが論文の論理展開にどのような機能を担っているのか分析・考察する。

## 2-3 本研究の目的

人文・社会科学系に多い「資料分析型」論文で、論文筆者が資料をどのように引用・解釈して結論へと導いているのか、その論理展開のための解釈構造を明らかにする。具体的には、論文筆者の引用・解釈に関わる文について、次の3点を研究課題とする。

- ①どのようなタイプがあり、それぞれどのような特徴をもっているのか。
- ②結論に至るまでの論文の論理展開にどのような機能を果たしているのか。
- ③引用・解釈に関わらない他の構成要素とどのように関わっているのか。

## 3. 方法

### 3-1 対象

佐藤他(2013)で「資料分析型」と判定された人文・社会科学系論文のうち、その特徴を最も強く持つ「文字・図版の質的資料のみを引用・解釈することで論理展開している」

「質的データ援用型」論文を分析対象とする。具体的には文学，社会学，政治／経済学の雑誌から当該論文型の占める比率に応じて直近の発行年の論文 10 本を選び，分析対象とした<sup>(3)</sup>。なお，本研究での「資料」は，各論文の研究・分析対象である原資料だけではなく，分析対象に関する先行研究，出典が明示されていない資料の 3 種を含む<sup>(4)</sup>。

3-2 分析方法

分析対象とした 10 論文の全章，全文（1915 文）について，引用・解釈にどの程度関わるのかという観点から意味的・形式的に共通・類似するカテゴリーに分類し，ラベル付けした。

例 1：鷗外の言う「其本領の在る所を説き示す役割 // はもはや小説内に措定することはできないのである。」<01-4-163> { // は，分析単位の区切りを示す }

例 2a：自序には「社会は猶劇場の如し小説は猶院本の如し」とあり，// 小説末尾にも「若し是れが芝居なれば」とある……<01-1-32>

例 2b：そこで，田宮は『忘れ得ぬ人々』の原稿を取り出し，秋山に読み聞かせる。  
<01-4-201>

1 文に複数の異なるカテゴリーを含む例 1 のような場合は，各カテゴリー要素を含む節単位に分解した。1 文に複数の同じカテゴリーを含む場合は，前件と後件で独立性の高い例 2a のような重文は分解したが，連続性の強い例 2b のような従属文は分解しなかった。こうして抽出した 2547 の分析単位を質的・量的に分析し，論文構造上の機能について考察した<sup>(5)</sup>。

4. 結果および考察

4-1 論文中の引用・解釈に関わる構成要素とその他の構成要素

分析の結果，表 1 に示す 10 カテゴリーが抽出された。このうち引用と解釈の双方に関わるのは「A 中立的引用文」，「B 解釈的引用文」，「C 引用解釈的叙述文」の 3 種である。これらは論文の研究対象である原資料，研究対象に関する先行研究，出典が明示されていない資料から引用・解釈している。引用の形式，用法，論文筆者の解釈の度合いを示す解

表 1 引用・解釈に関わる構成要素とその他の構成要素

カテゴリー	特徴	n=2547	100.1%
A.中立的引用文	資料の内容を忠実に再現する引用文	107	4.2%
B.解釈的引用文	資料の引用内容に対し論文筆者の解釈を含む文	364	14.3%
C.引用解釈的叙述文	資料の内容を論文筆者の解釈を通して引用叙述している文	588	23.1%
D.解釈文	資料の内容に対して筆者独自の解釈を与えている文	970	38.2%
E.推論を示す文	資料の内容から論文筆者が推論している文	169	6.6%
F.見解・主張を示す文	資料の内容を根拠に論文筆者独自の見解・主張を述べている文	241	9.5%
G.ブロック引用	独立して示された資料からの複数の引用文 ※1 文として扱う	88	3.4%
H.共有知識確認文	百科事典的，一般的情報レベルの内容を確認している文	10	0.4%
I.資料説明文	資料の内容ではなく，資料自体の説明をしている文	8	0.3%
J.先行研究の紹介文	先行研究の内容ではなく，その存在を示している文	2	0.1%

釈程度など、その特徴と機能は異なる。A は論文筆者の解釈程度が最も弱く、B、C と高まる。「D 解釈文」は資料の引用がなく論文筆者の解釈のみになる。B、C、D にはそれぞれ下位カテゴリーがある。下位カテゴリーにも解釈程度の強弱があり、各カテゴリーの典型から境界の例まで存在する。「E 推論」、「F 見解・主張」は、引用・解釈に関わる A、B、C、D をもとにしてそれぞれ論文筆者の推論、見解・主張が示される。A ～ F の境界は明瞭に区切られているわけではなく、資料寄りの A から、B、C、D へと論文筆者の解釈が強まり、E、F へと結論に至る連続体になっている。

「G ブロック引用」は、文外に独立して示される資料の引用文章の塊<sup>(6)</sup>であり、ABC のいずれかと組み合わせられる。「H 共有知識確認文」は論文の読み手にとって、一般的、教養的範囲内と思われる情報レベルの内容を説明・確認している文である。「I. 資料説明文」は、資料自体の説明文で、今回分析対象とした論文では人文科学系のみに見られた。「J. 先行研究の紹介」は先行研究の内容には言及せずその存在を紹介している文で、今回対象とした論文では人文・社会科学系で各 1 本、1 箇所のみであった。H、I、J は分析対象とした 10 論文にたまたま少なかったのか、あるいは資料分析型論文の特徴であるのかは定かではない。

量的には引用・解釈に関わる ABCD が全体の 8 割を占め、論文の中心的構成要素になっている。これら 4 種の引用・解釈に関わる文の特徴と、それらが他の要素とどのようにに関わり論理展開しているのかその機能について、次節で各カテゴリーのプロトタイプ例を挙げて考察する。なお、例文中のゴシック体はプロトタイプの形式、[ ] は該当カテゴリー以外の節や文、// は分析単位の区切りであることを示す。それ以外の記号は適宜説明を加える。

#### 4-2 「A 中立的引用文」の特徴と機能

「A 中立的引用文」は次の形式を持ち、出典が明示されている。

①～ハ/ニヨレバ+直接/間接引用部+ト+特定の中立的引用動詞（出典）。

②～ハ/ニヨレバ次ノヨウニ+ 特定の中立的引用動詞。 G ブロック直接引用（出典）。

例 3：パーソンズによれば、デュルケムは共通価値による秩序の安定を機械的連帯の社会にのみ結びつけ、有機的連帯の社会からは切り離したことによって「困難」を抱えているという（出典）。<07-3-96>

例 4：ガーフィンケルは次のように述べている。「不滅の日常的社会という社会的諸事実を生み出し記述している……は、……なものであり、……沿った研究である。こうしたものが……デュルケムが述べていた……なのだ」（出典）。<07-5-186, 187>

例 3 は文内に間接引用部を含む①の典型例で、「～ハ/ニヨレバ」、引用助詞「ト」、中立的引用動詞「イウ」から成る。出典は当該文ないしは前後の文に明示されている。出典が見当たらない非明示資料の間接引用は、人文・社会ともに 1 件ずつあった。例 4 は「G ブロック引用」を導入する②の典型例で、「～ハ次ノヨウニ」、引用符「」、中立的引用動詞「述ベル」から成る。引用符なしで改行・右寄せしているものも多い。そのような「G ブロック引用」を除き、引用符「」の有無は論文では、引用部に論文筆者の解釈が若干入る間接引用か、解釈が入らない直接引用かの厳密な区別になっている。しかし、「A 中立

的引用文」では間接引用であっても論文筆者の解釈は極力抑えられ、中立性が維持されている。この中立性は、「特定の中立的引用動詞」と、②の構文では「G ブロック引用」がほぼ直接引用であることによって補償されている。「G ブロック引用」はその 97% が直接引用で、残り 3% は箇条書きの間接引用である。「特定の中立的引用動詞」とは、引用内容の発語行為のみの遂行を担う中立的引用動詞〔いう〕と、引用内容自体の「述べ立て」と「書記行為」を表す〔述べる / 記す / 書く / ある〕のみで、極めて特定の発語内行為動詞に限られる。「叫ぶ / つぶやく」などの発語行為を示す引用動詞は、論文では必ずしも資料の著者や資料内人物の発語行為を示しているとは言えないため、ここには含まれない。この点、前述の「単一事態型」の引用動詞（砂川 1989）、また次節で述べる「B 解釈的引用文」の「解釈的述部動詞」とは異なる。

しかしながら、「A 中立的引用文」に論文筆者の解釈が全く含まれないわけではない。例 3、4 の\_\_\_\_\_の語は当該論文のタイトルに含まれている語である。タイトルに反映された論文筆者の主張・結論を内包するキーワードを引用部に示すことで、筆者自身の着目点を示唆しているのである。つまり、引用部の切り取り方に論文筆者の解釈が示されていると言える。

以上、「A 中立的引用文」は、論文筆者の資料の着目点を可能な限り忠実に再現し、中立的立場からその着目点を示すという機能を担っていると考えられる。こうした引用部の適切な切り取り方が、論文指導上の最初の重要なポイントになるものと思われる。

#### 4-3 「B 解釈的引用文」の特徴と機能

「B 解釈的引用文」は次の形式を持ち、文末または前後の文に出典が明示されている。

- ①（副詞句 / 節）＋～ハ / ニヨレバ＋直接 / 間接引用部＋ト＋解釈的述部動詞（出典）。
- ②～ハ / ニヨレバ次ノヨウニ＋解釈的述部動詞。G 直接 / 間接引用ブロック。（出典）
- ③直接 / 間接引用部＋トイウ＋解釈的動名詞 / 形式名詞＋デアル（出典）。／〔// 格助詞＋…。〕

例 5：蔣はこの対案に対し「全く関係がなく、ほとんど変えないに等しいもので、私の提案する改革案をおざなりにするためである。これはみな胡漢民の発意によっている」（出典）と不満を募らせている。<09-4-166>

例 6：『ジェンダー・トラブル』の中で、バトラーは次のような問いを掲げている。

ジェンダーを支配する規制の実践は、いかにして…(略) …ているのだろうか。  
言い換えれば、…(略) …とは、なのである。（出典）<06-5-123,124>

例 7：「行為をとおしたジェンダーの構築」というアイデア〔を // ……ことは、……にいくつかの困難をもたらしているように思われる。〕<06-3-52>

例 8：Maslow によれば、両者の違いは前者は他者によって動機づけられうるが後者はそうではないという点である。<10-3-148>

例 5 は構文①、例 6 は構文②、例 7,8 は構文③の典型例である。構文①、②の「解釈的述部動詞」は「主体の動作に書き手、すなわち論文筆者の解釈が含まれる動詞」である。構文③の「解釈的動名詞」はその派生名詞である。例 5 の「」内は蒋介石の記した中国語の資料から、論文筆者が日本語に訳して直接引用したものである。この引用内容に対して

論文筆者は「蒋介石が不満を募らせている」と解釈し、この視点から後に筆者独自の論に展開していく。例6は、「述べる」ではなく、「問いを掲げている」という述部動詞を用いることで、論文筆者が後続の「Gブロック直接引用」をバトラーの問題提起と解釈した上で引用していることが示されている。例7は、進化心理学者の人間行為に関する記述を、新たな考え方を示す「アイデア」であると、論文筆者が解釈してラベル付けしている。そして後件でこの視点から同理論に関する解釈をし、筆者独自の解釈へと展開している。例8は、Maslowのいう「両者の違い」を論文筆者がこのように解釈して要約した文を形式名詞「点」で名詞化し、この視点からその後の論を展開している。

ここで2-2 先行研究に示した発話例1)、2)に戻って比較してみる。例1)では、社長の「早く帰れ」で示される事態と、引用者の解釈を含む<b. 氣遣った c. せかした d. 命令した>の述部動詞で示される事態とは、文脈・場面、社長の発話の音調などのパラ言語情報によってそれぞれ相関関係にあり、確かに同一の事態であると考えられる。しかし、論文ではそうしたメッセージに付随する手がかりがなく、資料で起きている事態と論文筆者の捉えている事態との間にはそもそも大きな時間的・空間的隔たりが存在する。たとえば、例5ではこの同じ引用内容に対して「うなだれた」あるいは「罵った」と、別の述部動詞で異なる解釈を示し、異なる論理展開をすることも可能である。論文の引用では論文筆者独自の視点を通して異なる事態が新たに創造されている。そのため、異なる研究者が異なる視点から異なる解釈をすれば論文の流れは全く異なるものになる。こう考えると、「B 解釈的引用文」は元の発話の事態とは別の事態が示される「事態共存型の引用文」に相当するのではないかと考えられる。

「B 解釈的引用文」は、引用内容によって6種の下位カテゴリーが認められる。資料の著者・資料内人物の(1)言語行動、(2)思考、(3)位置づけ、(4)心的態度、(5)背景的状况、および資料内の(6)事柄の要約部分、に筆者の解釈が介在する文である。前掲の例5は(4)心的態度、例6は(1)言語行動、例7は(2)思考、例8は(6)事柄の要約のプロトタイプ例である。以下、その他の(3)位置づけと(5)背景的状况の例を示す。

例9：(3)実際、「寿永記」では武家政治の確立が〈源九郎〉(源義経)によってなされたとされている [// が、それは……。] <05-3-118>

例10：(5)蔣の不信の根底には「上海および南京特別市党部は…甚だしい。」という当時の地方党部の状況があった。<09-3-132>

例9は、「寿永記」の著者による(3)位置付けを示す文で、この後もこの位置付けの視点から論文の中心テーマである歴史と物語の関係性へと展開している。例10は、蒋介石の当時の(5)背景的状况に対する認識を表しており、その視点からその後の論理展開がなされている。

以上の6カテゴリー間には、はっきりとした境界があるわけではない。各カテゴリーの特徴を最もよく示す上記プロトタイプ例に対し、2～3カテゴリーの特徴を併せ持つ境界的文も多い。プロトタイプ例は上記例の他に、(1)言語行動は「説明/表現する」、(2)思考は「捉える、把握する」、(3)位置づけは「みなす、位置づける」、(4)心的態度は「批判/賞賛する」、(5)背景的状况は「時代背景がある」、(6)事柄は「ということである」など各カテゴリーの特徴を示す「解釈的述部動詞」が使用されている。境界的文にはこうしたプロト



タイプの述部動詞または「A 中立的引用文」の中立的引用動詞に、副詞句 / 節が付加している場合が多い。

例 11：たとえば杉山平助「文藝時評(4)」(出典)は、**皮肉な調子で次のように述べる**。

<05-2-46>

例 12：この箇所でカッシーラーは、「感性」と「知性」(悟性)を二元論的に扱うのではなく、……べきだと主張している。<03-4-112>

例 11 は、中立的引用動詞「述べる」に「皮肉な調子で」という副詞句が付加され、資料の著者または資料内人物の(1)言語行動がその(4)心的態度をも表している。なお、この場合は(4)心的態度に分類した。例 12 は、「主張する」という語彙の意味自体に(1)言語行動と(2)思考の両カテゴリーの意味がある。この場合は主張の内容から(2)思考に分類した。

以上、「B 解釈的引用文」は資料の著者・資料内人物の言語行動、思考、位置づけ、心的態度、背景的状况、事柄の要約を、解釈的述部動詞、動名詞、形式名詞、副詞句 / 節によって論文筆者の解釈の視点から引用・解釈し、論理展開の方向性を決定付けている。つまり、「B 解釈的引用文」は資料に対して筆者がどのような視点で捉えようとしているのかを示し、論文の位置づけ、その後の論理展開の方向づけを提示する機能を担っていると考えられる。

#### 4-4 「C 引用解釈的叙述文」の特徴と機能

「C 引用解釈的叙述文」は、引用標識「ト」の形式をもたず、論文筆者が資料の著者・資料内人物に寄り添い、その言語行動、思考、心理、背景を筆者自身の解釈を通して叙述している文である。引用形式がないために発話の引用研究では対象外とされている。しかし、論文では当該文または前後の文で出典が示され、その資料以外からは知り得ない情報が記述されていることから、資料に即して筆者が独自の解釈を交えつつ論述を進める、論文特有の引用・解釈的叙述文であると考えられる。実際、先行文で出典が示され、「直接引用」を含む例 13 のような文も少なからず存在する。

例 13：(正岡子規は)季節感や地域差の問題として「東京よりは稍寒き地方より出でし規定」である西洋の季節区分と並べて相対化している。<02-3-168>

下位カテゴリーには、前述の「B 解釈的引用文」の 6 種に、資料の著者・資料内人物の(0)具体的行動が加わり 7 種ある。例 13 は資料の著者である正岡子規の(2)思考を論文筆者が直接 / 間接引用混合文で解釈叙述している。この後、論文筆者独自の推論、解釈が展開されている。以下、その他のカテゴリーのプロトタイプ例を挙げる。

例 14：(0)さらに翌日、蔣介石は胡漢民を訪れ、[// 党務、政治、軍事の各問題について討議し、// その結果、……(略)……(出典)。] <09-2-44>

例 15：(1)続いて須磨への流謫後、都に残してきた女君たちへ向け、源氏は手紙をしたためる。<04-3-74>

例 16：(3)透谷が社会道徳をも凌駕する想世界として文学を位置づけた [// のに対して、……略……。] <08-4-68>

例 17：(4)横光は「文芸時評(四)」(出典)の中で、蔵原を名指しで批判している。

<03-2-30>

例 18：(5)デュルケムが生きた 19 世紀後半のフランスは、革命以降の混乱状態に悩ま



れた時期であった。<07-2-21>

例 19：(6)この場面は、庇護者であった父桐壺帝を失い、藤壺との関係もままならず、公私全てにおいて停滞を余議なくされた光源氏が、所在ない気持ちを紅葉狩りや仏事で紛らわすべく雲林院に参詣した場面である。<04-2-44>

例 14 は、資料の著者、蒋介石の(0)具体的行動を解釈叙述している文である。この(0)具体的行動の文は、政策、対策の施行などを伴う政治学、社会学の論文に比較的多く見られ、言語および思考の前提的行動として叙述されている。後件で、「討議する」という蒋介石の(1)言語行動を解釈叙述する文が続き、その言語行動に対して筆者独自の解釈が展開されている。例 15 は、資料内人物の源氏の(1)言語行動を解釈叙述している文である。この後、源氏の手紙および和歌の直接引用が示され、それらに対する論文筆者の解釈が展開されている。例 16 も資料の著者、北村透谷による文学の(3)位置づけが論文筆者によって解釈叙述され、その後、同時代の女性作家の文学的テーマが比較対照的に示されて筆者独自の論理が展開されている。例 17 は、資料の著者、横光利一の(4)心的態度を「名指しで批判する」と表現することで、横光が蔵原を強烈に批判しているという論文筆者の解釈叙述がなされている。この後、横光の思考を示す引用・解釈文がさらに続き、その思考に対する論文筆者独自の解釈に展開している。例 18 は、先行文で資料の出典が示され、その(5)背景的状况がこの文と後続文で叙述された後、論文筆者の推論へと展開している。例 19 は、先行文の『徒然草』で語られる『源氏物語』のある場面を論文筆者が解釈叙述している(6)事柄の要約文である。この後、筆者の疑問、推論、解釈へと展開している。

以上、「C 引用解釈的叙述文」は、資料の引用内容を論文の地の文に合わせて叙述し、論文筆者独自の解釈へと論理展開するのに有効に機能していると考えられる。

#### 4-5 「D 解釈文」の特徴と機能

「D 解釈文」は、資料に対して、論文筆者自身の解釈を示している文である。解釈の対象になるのは、4-1 表 1 に示した A～H の各カテゴリー内の文・文章で、論文筆者がどの要素に着目して解釈しているかで 3 大分類（ⅠⅡⅢ）、8 下位カテゴリー（①～⑧）に分けられる。以下順に、各カテゴリーのプロトタイプ例を示し、その機能を考える。

##### （Ⅰ）資料の著者・資料内人物の①言語行動、②思考・心的態度に対して解釈している文

①例 20：唯一「春立つや…」の句が、日付でなく風景で春を表現している。<02-2-112>

②例 21：彼の人間論が Maslow 理論を超えると位置づけられるか否かは議論の余地がある。<10-3-156>

例 20 は、先行文で正岡子規の「春立つや…」の句が原資料から「G ブロック直接引用」されており、その表現、つまり資料の著者の①言語行動に対して解釈している文である。

例 21 は、後続文に「彼 (=Frankl)」の人間論を示す「B 解釈的引用文」があり、その「彼」の②思考・心的態度に対して解釈している文である。

##### （Ⅱ）前・後の文・文章からある事柄を取り上げ③-⑦により議論・解釈している文

まず、直前・直後の文を解釈対象として議論を展開している、③話題を取り立てる、④指示表現で話題を継続する、⑤別の観点から捉える解釈文を見る。

③例 22：寛丹が正しいかどうかは、そこではあくまで留保されている。<05-3-117>

④例 23：**それは**，旧来の儒教道徳に対するアンチ・テーゼという意味ではラディカルな意味をもっていた。<08-3-46>

⑤例 24：随伴の結果**と言うとき**，あえて言えば，**それは**社会，組織，個人，それぞれのレベルにおける健康，健全性の問題と言えるのではないか。<10-4-183>

例 22 は，「覚丹」という資料内人物が執筆した戦争記録の「C 引用解釈的叙述文」と，「覚丹」の心的態度に対する解釈文（I）②が直前にあり，それらの文から「覚丹」が正しいかどうかという点を③話題として取り上げている。この話題に関する資料の引用と筆者の解釈が後続文でも繰り返され，結論につながる推論が導かれている。例 23 は，直前の「C 引用解釈的叙述文」の中心的话题を④指示詞で示し，この話題について継続的に解釈を加えている。例 24 は，直前の先行研究で用いられている「随伴の結果」という用語を取り上げ，⑤別の観点から捉えて再考し，解釈を展開している。

次に，前後の数文，数段落，あるいは節・章全体にわたる内容中のある事柄に着目して，⑥論点として提示する，⑦重要な論理展開要素として認定する解釈文を見る。

⑥例 25：**しかし警戒すべき問題がある**。<03-1-18>

⑦例 26：**つまり胡が描く訓政とは**，政府が各種の建設を行い，他方で党が自治の宣伝を行いつつ民衆に対して……を施すことによって進められるのである。

<09-3-104>

例 25 は，先行する 2 段落にわたる文章から「警戒すべき問題」を⑥論点として提示し，後続文でこの論点に関して議論している。例 26 は，段落の冒頭文で資料内人物の「胡」の考え方に関する⑥論点が提示され，その論点に関する「B 解釈的引用文」と後続の「G ブロック引用」で議論した後に，⑦重要な論理展開要素として認定している。

### （Ⅲ）段落・節・章の冒頭・末尾で，複数の文の⑧内容的まとまりを小括する文

⑧例 27：こうしてパーソンズは，『社会分業論』の中心的部分をしりぞけてしまった。

<07-3-97>

例 27 は，資料の著者であるパーソンズの目的を示した第 3 章の冒頭段落の末尾文から最終段落の直前の文までの 27 文で示されている内容的まとまりを小括している。

「D 解釈文」は，前節に述べた引用標識を持たない「C 引用解釈的叙述文」と，構文上，判別困難である。しかし，C では例 14-19 に見たように 0) 具体的行動，1) 言語行動，2) 思考，3) 位置づけ，4) 心的態度，の動作主体は資料の著者・資料内人物が主である。また，5) 背景的状况，6) 事柄の要約，も資料に関わる背景，事柄である。一方，D は資料からは距離を置いて，論文筆者の観点から資料内の解釈対象内のある事柄に着目し，独自に論理展開している。

以上，「D 解釈文」の 8 種の下位カテゴリーの機能をまとめると，図 1 のようになる。解釈文（I）の①と②は，前・後に示されている資料の著者・資料内人物の言語行動，内的・心的態度に対して論文筆者の視点から解釈しており，資料寄りの解釈文であると言える。解釈文（II）は，（I）より資料から距離を置いて，論文筆者独自の視点からある事柄に着目し，その事柄を様々な方法で取り上げ，論文筆者の論理構造の中で解釈を進めている。③④⑤は直前・直後の文・文章中で示されている事柄に，⑥⑦は①～⑤の D 解釈文，A，B，C の引用・解釈文を含む数文，数段落から節・章全体にわたる大きな単位を解釈対象とし

て、ある事柄を⑥論点として取り上げて議論を展開し、⑦重要な論理展開要素として認定している。解釈文(Ⅲ)⑧は、これまでの議論を小括することにより、次の段階に論理展開している。

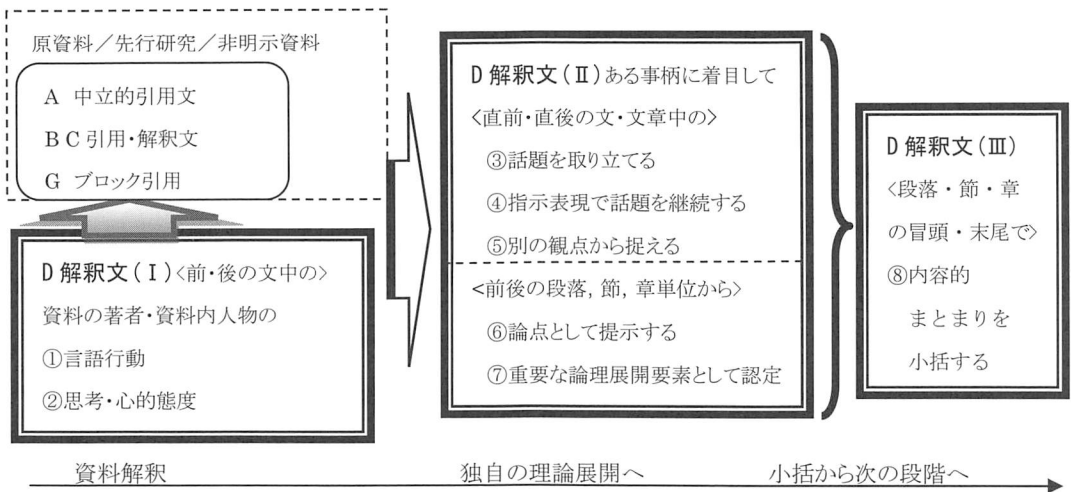


図1 「D 解釈文」の下位カテゴリーとその機能

#### 4-6 論文の引用・解釈構造

##### 4-6-1 量的特徴から見た引用・解釈構造

表2は「A 中立的引用文」、「B 解釈的引用文」、「C 引用解釈的叙述文」と「D 解釈文」の割合を人文科学・社会科学別に示したものである。また、表3はA, B, C, 3種の引用・解釈文の直接引用と間接引用の割合を人文科学・社会科学別に示したものである。人文・社会科学ともにAに比べB, Cが多く、Dが最も多いという傾向は共通している。また、Aは直接引用が半数以上と多く、Bは直接引用が少なくなる一方で間接引用が増え、Cは直接引用が1割未満で間接引用が大半を占めるという傾向も共通している。これは、論文ではAからB, Cにかけて論文筆者の解釈程度が強くなり、その論文筆者の解釈が強い文ほど出現頻度が高く、重要性が増すことを示唆していると考えられる。

しかし、表2, 3から人文と社会科学では若干傾向が異なることがわかる。人文科学はA, B, Cすべてで直接引用が社会科学より多い。直接引用と間接引用の混合文も直接引用ほどではないが、A, B, Cすべてで人文の方が多。また、人文科学は社会科学より「A 中立的引用文」と「B 解釈的引用文」が多い。一方、社会科学は間接引用がA, B, Cすべてで多く、「C 引用解釈的叙述文」が多い。「D 解釈文」は、人文と社会科学でほとんど変わらないが、人文の方がやや多くなっている。このような量的特徴から、人文科学では資料の切り取りとその中立的再現に重点が置かれ、その切り取られた中立的引用に対して解釈するという傾向がうかがえる。一方、社会科学では、資料を中立的に再現することよりも、資料に即しつつ論文筆者の解釈を加えていくことに重点が置かれるという傾向がうかがえる。

表2 ABCの引用・解釈文とD解釈文4種の人文・社会科学別割合 n=2029

A 中立的引用文 (5.3%)		B 解釈的引用文 (17.9%)		C 引用解釈的叙述文 (29.0%)		D 解釈文 (47.8%)	
人文	社会	人文	社会	人文	社会	人文	社会
7.0%	3.8%	19.2%	16.9%	25.2%	32.2%	48.6%	47.1%

表3 引用・解釈文3種の直接引用と間接引用の人文・社会科学別割合 n=1059

引用形態 直/間	A 中立的引用文 n=107			B 解釈的引用文 n=364			C 引用解釈的叙述文 n=588		
	全体	人文	社会	全体	人文	社会	全体	人文	社会
直接引用	66.4%	76.9%	50.0%	29.9%	39.9%	20.4%	2.6%	3.9%	1.7%
直接+間接	9.3%	10.8%	7.1%	24.5%	32.6%	16.7%	12.2%	18.9%	7.9%
間接引用	24.3%	12.3%	42.9%	45.6%	27.5%	62.9%	85.2%	77.3%	90.4%

表4は「B 解釈的引用文」と「C 引用解釈的叙述文」の下位カテゴリーの割合を人文科学・社会科学別に示したものである。B, Cともに資料の著者・資料内人物の(2)思考の引用描写が最も多く、(1)言語行動がそれに続く。(3)位置づけはB, (5)背景と(6)事柄の要約はCのほうが多い。表4からも資料の中立的再現を重視する人文科学と、論文筆者の解釈を重視する社会科学の傾向が読み取れる。人文科学は(1)言語行動がB, Cともに多いが、社会科学は(2)思考, (3)位置づけ, (4)心的態度が多い。これは、人文科学は言語的に可視化された中立的表現に対する解釈が多いのに対し、社会科学は思考・位置づけ・心的態度という抽象的・不可視的な内的活動に対する解釈が多いことを示していると言える。

表5は「D 解釈文」の下位カテゴリーの割合を人文科学・社会科学別に示したものである。人文・社会科学で多少の違いはあるが、どちらも(Ⅱ)⑥論点の提示が最も多い。続けて、②内的・心的態度に対する解釈、⑦重要な論理展開要素の認定が多い。①言語行動に対する解釈がそれほど多くないのは、資料から一定の距離を置いている「D 解釈文」では、人文・社会科学ともに抽象的・不可視的な内的活動に対する解釈がなされるために、②内的・心的態度に対する解釈が多くなるのではないかと考えられる。

以上から、人文科学と社会科学では若干の違いが見られるものの、引用・解釈構造においては大差なく、量的側面からも資料を忠実に再現するA, 資料と論文筆者の解釈の中

表4 「B 解釈的引用文」と「C 引用解釈的叙述文」の人文・社会科学別下位カテゴリーの割合

下位カテゴリー	B 解釈的引用文 n=364	人文	社会	C 引用解釈的叙述文 n=588	人文	社会
(0)具体的行動	—			3.4%	2.1%	4.2%
(1)言語行動	30.5%	40.4%	21.0%	21.8%	29.6%	16.6%
(2)思考	43.4%	36.0%	50.5%	37.2%	32.6%	40.3%
(3)位置づけ	11.8%	7.9%	15.6%	2.9%	3.4%	2.5%
(4)心的態度	10.4%	11.8%	9.1%	14.1%	8.6%	17.7%
(5)背景的状况	0.3%	0	0.5%	12.4%	18.0%	8.7%
(6)事柄の要約	3.6%	3.9%	3.2%	8.2%	5.6%	9.9%

表5 「D 解釈文」の人文・社会科学別下位カテゴリーの割合

下位カテゴリー		D 解釈文 n=970	人文	社会
(Ⅰ)資料の著者、資料内人物の ①②に対して解釈	①言語行動に対する解釈	5.5%	6.9%	4.2%
	②内的・心的態度に対する解釈	21.6%	20.4%	22.7%
(Ⅱ)前後の文・文章から ある事柄を取り上げ ・③-⑦により解釈	③話題として取り立てて議論	6.2%	8.0%	4.6%
	④指示表現で示し議論継続	7.8%	6.4%	9.0%
	⑤別の観点から議論	7.5%	5.3%	9.4%
	⑥論点として提示	31.4%	36.4%	27.1%
	⑦重要な論理展開要素の認定	11.6%	10.8%	12.3%
(Ⅲ)複数の文に対し	⑧内容的まとまりの小括	8.2%	5.6%	10.6%

問的位置にあり両者を結ぶ B、資料に即し筆者独自の解釈を展開する C、筆者の解釈構造の中で主張・結論に導く D という引用・解釈構造が読み取れる。

#### 4-6-2 典型的な論理展開パターンと引用・解釈構造

では実際どのように論理展開しているのか、前掲の例 20-27 で見てみよう。まず、どの文も先行文に D(Ⅱ)⑥論点提示の解釈文が出現する。例 20 では、「もちろん、年内立春のように、暦と季節のずれに着目する趣向自体は、近代以前においても珍しいものではない。」<107> と、「子規句もまた、正月が春という考えと、実際の季節のずれに注目している。」<109> という 2 文によって季節と暦のずれに関する論点が提示されている (<> の数値は文番号)。例 21 は、「最後に自己実現人を超越のものとして評価される Frankl の議論に触れねばならない。」と、前文で D(Ⅱ)⑥論点が提示されている。例 22-27 も同様、まず D(Ⅱ)⑥論点提示がなされている。この論点提示の後、A、B、C の引用・解釈文と G ブロック引用、D 解釈文①～⑤、そして時に E 推論、F 見解・主張が入り、最後に D(Ⅱ)⑦重要な論理展開要素として認定、もしくは D(Ⅲ)⑧内容的まとまりの小括で締めくくられる。例 20 でその流れを見てみよう。D(Ⅱ)⑥論点提示文に続く 2 文<110,111>の前件で、資料の著者の C1) 言語行動が解釈的引用叙述され、後件でその言語行動に対する D(Ⅰ)①解釈文と、E 推論がなされる。そして再度 D(Ⅰ)①言語行動の解釈文<112>により筆者の視点から議論が進められた後、「こうして見ると、句意に大きな変化はなく、「寒山落木」の季節区分の変化と相関関係があるとは思えない。」<113> という、D(Ⅲ)⑧内容的まとまりの小括文で、これまでの議論が一旦締めくくられる。例 21 は、「心理的健康の実現こそが両者のテーマだからである。」<164> と、D(Ⅱ)⑦重要な論理展開要素の認定により、議論が締めくくられている。例 22-27 も D(Ⅱ)⑦重要な論理展開要素の認定で同様に締めくくられ、次の段階に進展している。

図 2 はこのような一連の論理展開パターンを示したものである。この一連のパターンが繰り返され、徐々に結論に導かれていく引用・解釈構造が認められた。

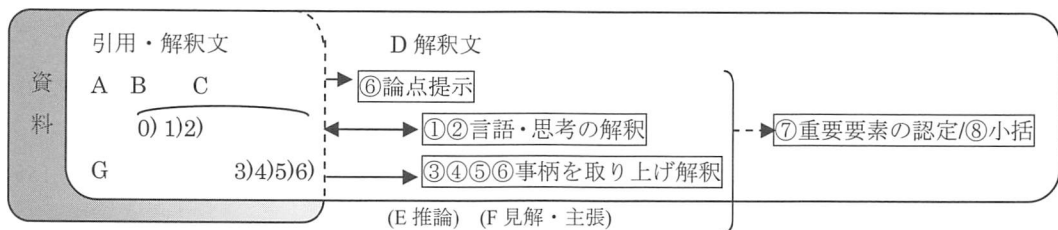


図2 典型的な論理展開パターン

## 5. 結論および今後の課題

人文・社会科学系に多い「資料分析型論文」で、論文筆者が資料をどのように引用・解釈して結論へと導いているのか、その論理展開のための解釈構造について質的・量的に分析した。その結果、引用・解釈に関わる文には「A 中立的引用文」、「B 解釈的引用文」、「C 引用解釈的叙述文」、「D 解釈文」の4種があり、それぞれ論理展開に独自の機能を果たしていることが判明した。Aは資料の着目点を中立的立場から引用・提示する。Bは資料を論文筆者の立場から引用して解釈構造の軌道に乗せる。Cは資料との内容的関連性を持たせつつ論文の解釈構造の中で引用叙述する。Dは資料には一定の距離を置いて読み手を論文の解釈構造の中に巻き込み、主張・結論へと導く。典型的な論理展開パターンとしては、まずDの論点提示文から始まり、その後、この論点についてABCの引用・解釈文とGの長文ブロック引用で資料を示しつつ解釈が展開し、Dの多様な下位カテゴリーによって論文筆者独自の議論へと進展する。そして時にE推論、F見解・主張が入り、最後に重要な論理展開要素として認定もしくは内容的まとまりを小括するDで締めくくられる。これらの一連の論理展開パターンが繰り返されて結論に至るという引用・解釈構造が認められた。量的には、ABCDの4種で全体の8割を占める。また、Aに比べBCが多く、Dは全体の4割近くを占める。量的特徴からもBCDの効果的指導が論文指導の鍵を握っていると考えられ、その教材開発を最終目標としたい。

## 付記

科学研究費補助金基盤研究(B)「研究成果の日本語による受信発信の支援を目指したニーズ調査とリソース開発」(課題番号2230220104, 研究代表者:大島弥生)からの助成を得た。大島氏は本研究の研究協力者である。なお、本研究は参考文献の(8)(9)にさらに分析・考察を加えたものである。

## 注

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果による (<http://www.jasso.go.jp/statistics/intl.student/data13.html>) (2014年7月5日アクセス)
- (2) 人文科学系は文学, 日本語学, 日本語教育学, 社会科学系論文は社会学, 経営学, 政治/経済学, 工学系は材料工学, 機械工学, 建築工学で, 3領域9分野から30本, 計270本である。
- (3) 人文科学系論文(01-05)は『日本近代文学』3本と『日本文学』2本, 社会科学系論文(06-10)は『社会学評論』3本, 『日本経営学会誌』と『アジア研究』が各1本で, 計10

本である。

01：富塚昌輝「＜批評＞の水脈―石橋忍月初期作品を起点として」82,45-60,2010

02：永橋禎子「季節に対する意識の変質―正岡子規の新年・春の扱いを中心に」82,93-108,2010

03：位田将司「横光利一における「形式主義」―「個性」という形式について―」82,156-171,2010

04：中野貴文「『徒然草』「第一部」と光源氏」59(6),1-11,2010

05：滝口明祥「歴史＝物語への抗い―井伏鱒二『さざなみ軍記』」59(6),23-33,2010

06：小宮友根「行為の記述と社会生活の中のアイデンティティ―J. バトラ―「パフォーマティヴィティ」概念の社会学的検討」60(2),192-208,2009

07：高橋章子「相互行為論のデュルケム―デュルケム、パーソンズ、ガーフィンケルの秩序形成の論理を比較して―」60(2),209-224,2009

08：岡田章子「『女学雑誌』におけるキリスト教改良主義と文学」60(2),242-258,2009

09：岩谷将「訓政制度設計をめぐる蒋介石・胡漢民対立―一党と政府・集権と分権」53(2),1-18,2007

10：山下剛「Maslow 理論はモチベーション論か」22,66-78,2008

なお、論文で例の末尾の記号、＜○-○-○＞は、論文番号、章、文の番号を示している。

- (4) 分析を進める中で、論文筆者がある資料に対してどのように引用・解釈するかにおいては、その資料がどのタイプであっても変わらないことが判明したため、これら3種を対象とした。
- (5) 総文数と総分析単位数は、人文科学系は934文；1242，社会科学系は981文；1305である。
- (6) 引用部は一つのまとまりとして1文，1分析単位として計算した。

## 参考文献

- (1) 加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』町田健編シリーズ日本語の仕組みを探る6 研究社
- (2) 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子（2013）「学術論文の構造型とその分布―人文科学・社会科学・工学270論文を対象に―」『日本語教育』154号：85-99
- (3) 砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性」『日本語学』7巻9号：14-29 明治書院
- (4) 砂川有里子（1989）「引用と話法」『講座 日本語と日本語教育4』355-387 明治書院
- (5) 中園篤典（2006）『発話行為的引用論の試み』ひつじ書房
- (6) 藤田保幸（1986）「文中引用句「～ト」による「引用」を整理する―引用論の前提として―」宮路裕編『論集日本語研究（一）現代編』明治書院
- (7) 藤田保幸（1988）「「引用」論の視界」『日本語学』7巻9号：30-45 明治書院
- (8) 山本富美子・二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子（2014）「引用から解釈に至る引用文の多様性」『第16回専門日本語教育学会研究討論会予稿集』16-17
- (9) 山本富美子・二通信子・大島弥生（2014）「論理展開に関わる解釈文の分析」『2014年度日本語教育学会春季大会予稿集』158-163

（山本一武蔵野大学，二通一室蘭工業大学）



**Quotation and Interpretation Structure of Literature-Analysis Papers:  
Basic Research on Instruction for Writing Papers  
in the Humanities and Social Sciences**

YAMAMOTO Fumiko and NITSU Nobuko

This study analyzes the manner in which authors quote and interpret the texts they make use of in literature-analysis papers in the humanities and social sciences in order to develop their logic and lead to their conclusion. The result indicates that there are four types of quotation and interpretation: A) neutral quotation, B) interpretative quotation, C) interpretative quoted description, and D) interpretation. Each of these types performs a specific function in developing the author's logic. Type A presents the texts that the author studied, reproducing these materials as neutrally as possible. Type B, in quoting some texts from the author's point of view, guides the reader into the author's interpretative structure. Type C states the author's interpretation of the texts using his or her own interpretive structure in correlation with the content of the materials. Type D, presenting the author's interpretation apart from the materials, leads the readers into the author's original logic and subsequently to his or her conclusion. A logical development pattern can be observed in such papers. For example, quotes may appear starting from a sub-category of type D, in which the point of an argument is indicated, progressing to quotations and interpretation using types A, B and C, and the other sub-categories of type D, finally concluding with the recognition of an important disputed point or the summary of a particular argument. Given their quantitative importance, it is important to instruct learners on how to use types B, C and D as effectively as possible.

(Yamamoto: Musashino University, Nitsu: Muroran Institute of Technology)